

SHOW HEYシネマルーム

★★★

バッドボーイズ2バッド

配給/ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

2003 (平成15) 年10月8日鑑賞

<試写会>

Data

監督: マイケル・ベイ

出演: マーティン・ローレンス/ウ

イル・スミス/カブリエル・

ユニオン/ジョルディ・モー

ラ

👁️👁️ みどころ

マイアミ市警の敏腕コンビであるバッドボーイズのマーカス（マーティン・ローレンス）とマイク（ウィル・スミス）が麻薬王の密輸ルートを追って繰り広げる、何ともド派手なカーチェイスと銃撃戦。そのハイライト場面は一度ならず二度三度も……。二人の黒人コンビの機関銃のようなしゃべくりとちょっとエッチなスラングの数々も見モノ。2時間26分という長編を見終わった後、「目がチカチカする……」とのオバサンの声がなぜか印象的。ホントに、俺もああ疲れた……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<バッドボーイズのパートII>

マイアミ市警、麻薬特捜チーム（TNT）に所属する敏腕刑事コンビ、「BAD BOYS」のマーカス・バーネット（マーティン・ローレンス）とマイク・ローリー（ウィル・スミス）が『BAD BOYS』の「パートII」で再登場。舞台は地元のマイアミだが、今回の任務はデカイ。

それはアメリカ東海岸最大の麻薬王ジョニー・タピア（ジョルディ・モーラ）の麻薬密輸ルートを解明することだ。タピアが現金を送り込むのは、何と共産国のキューバ。

2人の「BAD BOYS」の「奮闘」により、この阻止に成功したかに見えたが、ニューヨークにある連邦麻薬捜査局に所属し、危険な潜入捜査の任務に従事していたマーカスの妹シド（カブリエル・ユニオン）の身元がバレて、キューバに連れ去られた。「アメリカは人質犯とは交渉しない!」と宣告され、思い悩むマーカス。万事休すか……？

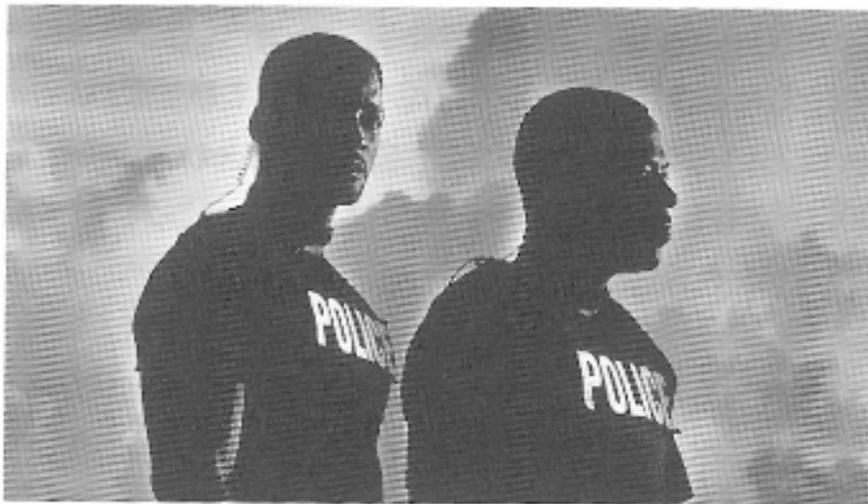
<カーチェイスと銃撃戦のオンパレード>

この映画の上映時間は2時間26分と長丁場。そしてその間に、ハイライトとなるカーチェイスと銃撃戦が何回も展開される。それも生はんかなものではない。これでもか！これでもか！と思うほど、次々と車を潰していく。

カーチェイスを売りモノにするハリウッド映画は多いが、この『BAD BOYS』シリーズの特徴は、それに加えたマーカスとマイクの2人のしゃべくり。黒人特有のユーモアと機関銃のような早口かつ大声のしゃべくりが、カーアクションと銃撃戦の間も、ずっとついてまわる。だからカーアクションと銃撃戦の音と2人のしゃべくりで、映画は全編ドルビー音響の大活躍。

最後のハイライトは、舞台をキューバに移しての人質シドの「奪還作戦」。マーカスとマイクは、キューバにある「反カストロ勢力」の助けを借りて、タピアの屋敷へ「殴り込み」だ。もうメチャクチャ。ど派出な銃撃戦。そしてカーチェイスというよりも、空を飛ぶカーアクションだ。

見終わった後、オバちゃんの声が聞こえた。「ああ、目がチカチカして疲れた。でもマトリックスより面白かったね・・・」。



<2人はマイアミ市警の警察官だが・・・>

「BAD BOYS」のマーカスとマイクは2人ともれっきとしたマイアミ市警所属の刑事。2人ともアウトロー刑事と言われているが決して不真面目ではない。むしろ任務に忠実で、刑事としての仕事に誇りをもっている模範的な警察官だ。

しかし任務のために2人が現実在活动中と始めると・・・。なぜかその任務遂行はハチャメチャとなり、カーチェイスと銃撃戦のオンパレード。いや、話は逆だ。そういうストー

リーになるように、2人の刑事のパーソナリティをうまく作っているというべきだろう。

そうすると、このシリーズは観客が楽しいと思う限り、いつまでも続けることができることになるが・・・。

<やめて欲しい小道具としての「死体」>

麻薬王タビアが麻薬や現金の輸送に使ったのは人間の死体。従って、この映画ではアジトの1つが葬儀社だし、ドラマの舞台の1つが死体安置所となる。死体安置所に乗り込んだ2人は死体の隣にもぐり込まざるを得ないような場面も。さらに死体を積んだ車の追いかけてこでは追跡を逃がれるために死体をポンポンと落下させたり・・・。

映画を面白くさせるための設定としていろいろ工夫しているのは分かるが、私は気持ち悪いシーンは苦手。上映中ずっと隣でポリポリとお菓子をかじり、ペットボトルのお茶を飲んでいたオバちゃんは、何の抵抗もなしにこの死体の場面を観ていたし、へらへらと笑っていたが、私は時々手で目を覆って、その気持ちの悪いシーンはカット・・・。

また、倫理上から見ても、映画を面白おかしくするためとはいえ、死体を小道具として使うのはどうかと思うが・・・。検討してもらいたい！

<スラングの勉強にも最適>

全編を通じて、マーカスとマイクの2人のしゃべくりは圧巻。

マーカスの妹のシドが今回は、連邦麻薬捜査局の捜査官としてクールな役で登場しているため、特に男2人のしゃべくりが際立っている。そして最初の銃撃戦でお尻を撃たれた(?) マーカスは神経をやられた(?) のか、「あちらの方」がダメになったとのこと・・・? 大ショックのマーカス。マイクはこれを慰め励ますが、なかなか効果なし。しかし、捜査中誤って合成麻薬エクスタシーを飲んだマーカスはたちまち××が回復・・・?

こんなギャグに、多くのオバちゃんたちは大きな声をあげて喜んで笑っていたが・・・。

日本語の字幕だけではなく、次々とマーカスとマイクの口から飛び出す英語のスラング(俗語)が分かれば、これらの会話(?)の楽しさが倍増することだろう。だから、この映画はスラングの学習にも最適だ。

2003(平成15)年10月9日記